

かべの認識と空間概念に関する研究

北タイ山地民の住居事例を通して

Keywords

かべ 素材
近代化 境界



K06095

古舘美聡

1. はじめに

建築にはかべの配置が不可欠であるが、かべで空間を分節することはどのような意味を持つのか。本研究は自然発生的な住居を対象としたフィールドワークをもとに、人間の暮らしとかべの役割について考えるものである。

フィールドワークでは、①悉皆的な聞き取り調査、②住居内平面実測調査、③集落図調査の3つを行った。

2. 調査地の概要

調査地である JT 村はタイ北部チェンライ県の山地に 1961 年に創設されたラフ・ニ族の村である(図 1)。ラフ・ニ族は、中国からタイへ流入した山岳少数民族である。焼畑農業で生計を立て、農地の衰えとともに移転することを常としていたが、近年はタイ政府の介入により定住化が進んでいる。宗教は祖先崇拝に基づくアニミズム信仰が人口の 7 割を占めるが、JT 村においては近年キリスト教へ改宗する世帯が増加傾向にある。

ラフ・ニ族の一般的な住居は高床式で、竹や茅で構成されている(図 2)。「山側からアクセスするために、露台に階段をつけること。住居入口の対角にアニミズム信仰の祭壇を配置すること。祭壇が外部者の目に触れないようにかべを作り、祭壇側を寝室とすること」というアニミズム信仰に基づいた間取りをもつ。しかし今回の調査では、金属の屋根や木の製材を用いる、2 階建て住居が建てられるなどの傾向が一部で確認できた(図 3)。

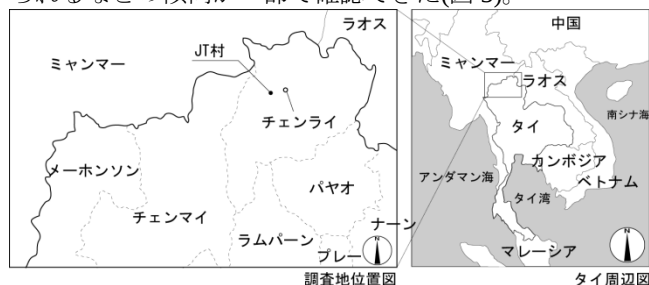


図 1 調査地の位置

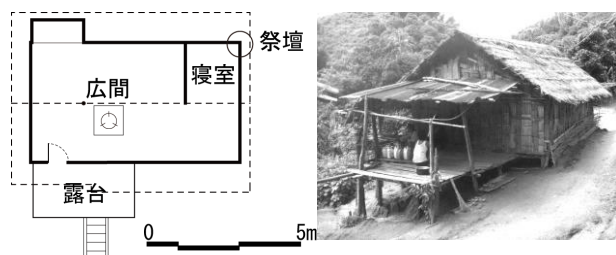


図 2 典型的なプラン(JT-23)と外観(JT-20)

3. 素材の近代化による影響

集落の中に竹以外の素材が流通し、建設の方法も一部で大工に依頼する傾向がみられる。その結果として住居の建材や形態にどのような影響を及ぼしたのかを探る。

3-1. 築年数

伝統的な住居は主に竹や茅で構成されるため、雨や虫食いなどにより傷みやすい。そのため、メンテナンス上の理由から、比較的短期間で建て替えが必要になり、築年数が浅くなる傾向がある。しかし建材である竹が近年入手しづらくなっていることもあり、建替えのたびに新しい建材を探すには多大な労力や費用がかかってしまう。そのため、竹や茅に代わって木の製材、スレートや波形鉄板の屋根を町で購入し、住居の建材として利用する世帯が増加傾向にある。

屋根について過去と比較すると下図のようになる(図 4)。耐久性を重視し築年数を向上させるこのような傾向は、焼畑農業により頻繁に移動していたころの傾向とは明らかに異なっている。住居形態も自力建設による簡素な構造の住居ではなく、他村の大工に依頼して建設された 2 階建てのタイ式住居が見られるようになった。このように定住化へ生活様式をシフトしたことで、素材や住居形態に変化が見られるようになっている。

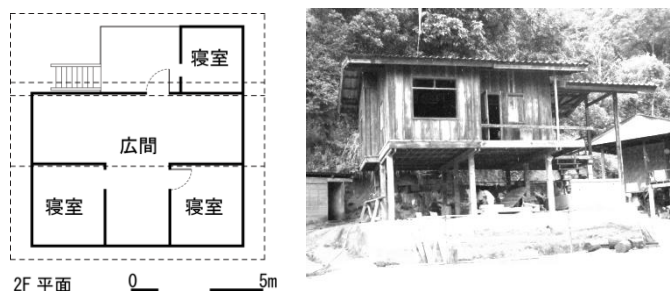


図 3 近代的な住居のプラン(JT-01)と外観(JT-41)

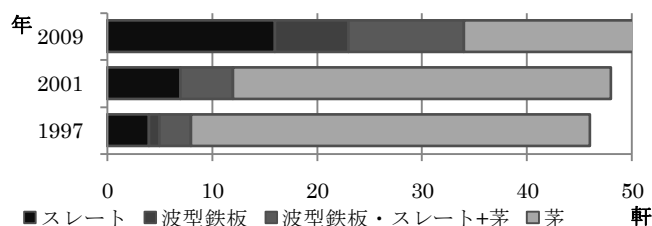


図 4 屋根素材の変化

3-2. 建材

住居の一部のみを近代的素材に変更する場合、屋根・かべ・床のどれに重きを置くのか検証する。集計の結果、屋根に最も近代的な素材の流入が見られ、かべと床に関しては大きな差が見られなかった。これは近年、木材の入手が困難になってきていることに起因している。経済的にゆとりがある世帯でも、木の製材に関しては古い住居の資材を購入したり、木の製材をかべとして住居内に備蓄したりする世帯が見られた。そのため、住居内に不自然なかべが現れるなど、資材確保のための工夫が間取りにも影響している。

3-3. 場所によるかべの使い分け

一つの住居内で数種類のかべの素材や編み方を使い分けている場合、どのような箇所で使い分けが起きているのかを探ると、ミチに面した住居ではミチ側に木材や編み竹などの、より堅牢なかべを配置している傾向があった(図 5)。このことから、住居の建材は利便性でのみ決定されているのではなく、住居を立派に見せようという豊かさへの憧れによっても決定されていると考えられる。

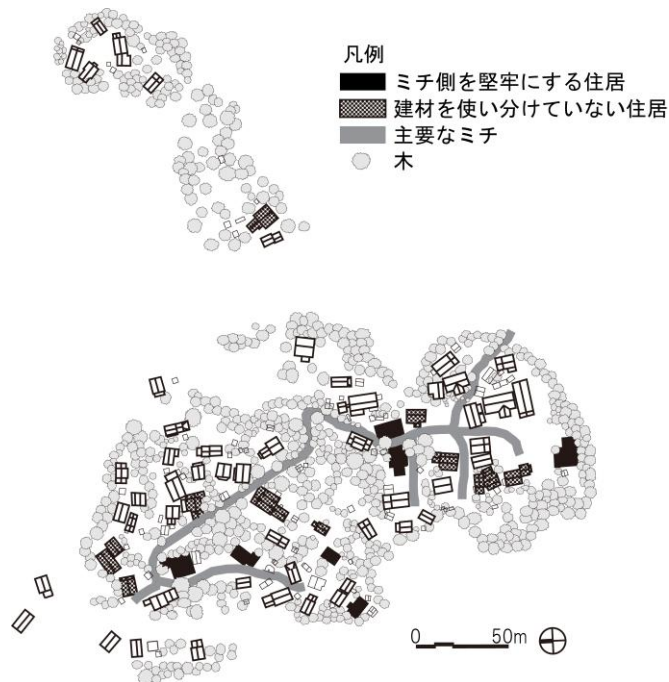


図 5 かべを使い分けている住居とミチの関係

4. 各空間の性質の変化

住居の素材や形態に変化が起きたことに伴い、空間の使われ方にどのような変化が起きているのかを用途別に探る。

4-1. 室数の増加

世帯の構成人数が年々減少傾向にあるのに対し、住居のかべの枚数は増加傾向にある。これは炊事場が母屋から離れたこと、前述のような木材備蓄のための内壁が出現したこと、個室がつけられるようになったことに起因していると考えられる(図 6)。

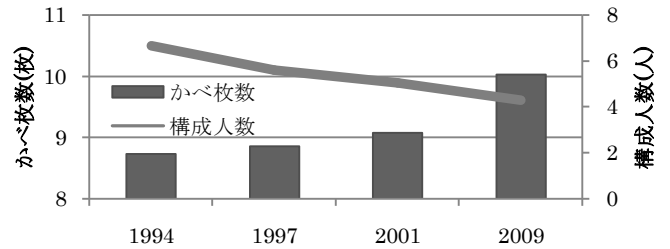


図 6 各世帯のかべの枚数と構成人数の推移

個室の用途に注目すると、そこは寝室か物置部屋、あるいは儀礼空間として使われている。本来、ラフ・ニ族はほぼ一室の空間で住居を構成し、寝食をすべてその中で完結させていた。頻繁に移動するために所有物が少なかったため、唯一のかべで仕切られた部分は寝室と祭壇があるのみであった。かべや個室がつけられるのは、娘や息子が結婚し、新たに寝室がつけられるときのみである。ところが、つけられた個室は新たな家族のためのものではなく、個人の寝室や物置部屋として使われている。住居の中に個室を主張する空間やものが占有する空間ができ、それを囲むためのかべが構築されていることがわかった。

4-2. 就寝場所

ラフ・ニ族の就寝場所である寝室は、かべで広間と分離された空間であり、住居内で最も私的な空間となっている。しかし、今回の調査で必ずしも慣習通りに寝室で就寝している事例が多く確認された。また住居内のかべを新聞紙や布、ポスターなどで覆っている住居が多く観察された。布によるこの囲いは就寝場所という最も私的な空間を外部と隔絶するためのものと考え、囲いとミチの関係を探った。すると、囲いを設けた場所が就寝場所であるという世帯は意外に少なく、この布はかべによる私的空間を補強する意味合いが薄いことがわかった。

また、窓を持つ住居の半数が、窓を板やタンスでふさぐか布で覆っていた。これらは明らかに何かを外部と隔絶するものである。囲いの布と合わせて、ラフ・ニ族が外部から何をさえぎり、内部で何を守っているのかを探る。すると、窓を塞いでいた住居はアニミズムを信仰する世帯に多いことが分かった(表 1)。アニミズム信仰では住居外側には精霊がたくさんおり、外壁を境界として精霊の世界と人間の世界が区別されている。窓はラフ・ニ族の伝統的な住居にはないもので、住居形態の変化によって現れたものである。近代的な住居に憧れる一方で、ラフ・ニ族特有の境界意識を保ち続けていることが読み取れた。

表 1 窓を持つ住居の窓の状態(カッコ内は住居番号)

		宗教	
		アニミズム	クリスチャン
窓を	塞ぐ・閉める	01,06,40,41,	07,
	開ける	02,	03,10,48,49

4-3.接客場所

つぎに、ラフ・ニ族の住居内外の境界意識が接客場所にどう影響しているのかを探る。

はじめに、住居の空間を公共性の高い場所から順に、2階建て住居の床下、露台、炊事場(別棟)、炊事場(母屋内)、広間、寝室の6つに分類し、つぎに、聞き取り調査が行われた場所から、各世帯の接客場所についての分析を行う。

接客場所として一番多かったのは露台である。露台は住居内と同じ床レベルにありながらかべが無い、内と外の境界のあいまいな空間である。住居の中へは上げずに接客することは前節から、ラフ・ニ族の境界意識を垣間見ることができる。また、ほかの接客場所についてみると、2階建て住居の床下は露台よりも公共性が高いにもかかわらず、接客としてつかわれる事例が少ない。それは、前提条件として、その住居が2階建てでなければならないためである。2階建ての住居は14軒あり、そのうちキリスト教徒や店舗を併設した住居以外は床下での接客が多かった。このことからアニミズムにおいて2階建て住居の床下は、露台以上に、住居の内外を分ける境界から離れているため、接客空間として利用される傾向があることがわかった。そのほかの空間も同様に検討した結果、接客場所としては、店、2階建て住居の床下、露台、炊事場(別棟)、炊事場(母屋内)、広間の順に優先順位が高い傾向が読み取れ、これは公共性の高さにも合致する。それと同時に、アニミズムにおいては、住居に家族以外のものをあまり入れようとしない意識がうかがえる。

4-4.炊事場

4-1で、かべの枚数が増加した原因に炊事場が分離していることを挙げた。炊事場のプランは大きく4つに分類することができる。以下に4種のプランのモデル図と、その推移を示す。

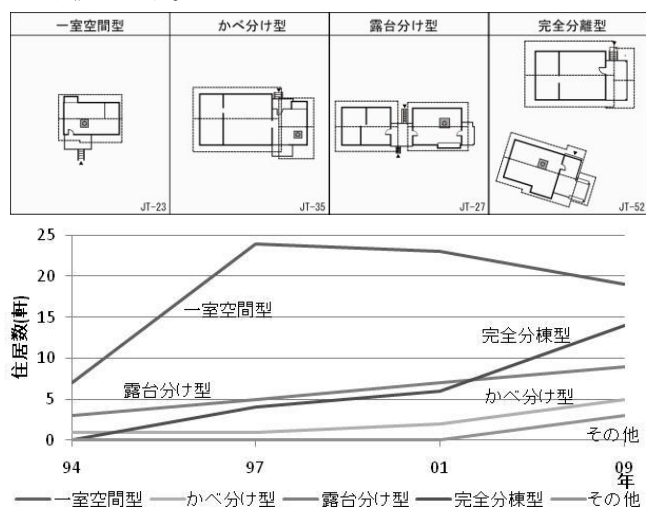


図7 炊事場の型と推移

炊事場が母屋の中に取り込まれた一室空間型は減少傾向にあり、一方で炊事場を別棟で立てる完全分離型が急速に増加傾向にある。これは、炊事場の建材が傷みやすいことと、排煙の問題に起因していると考えられる。屋根を金属で葺くことで、茅に比べて丈夫で長持ちするようになった半面、炊事の際の煙が外へ排煙されづらくなっている。このことによって室内に煙が充満してしまうため、炊事場をかべで区切り、つぎに露台を介してわけようになり、さらに棟を分けて炊事棟を建設するようになったと推測できる。

また、大工によって建設された住居は、すべて露台分け型か完全分離型に分類される。炊事場は前述のとおり傷みやすいため、メンテナンスの周期が早い。そのため、自力でメンテナンスできるよう、炊事場だけを母屋から切り離しているのではないかと考えられる。

5. 考察

JT村では言い伝えやアニミズムの世界観に基づいた伝統的な住居に変化が起きている。ここでは、素材や間取りのこうした変化をもたらす要因とその背景にあるものを探る。

5-1.素材

建材の素材の選択肢が増えたことにより、住居形態が多様化している。そこには住居の耐久性を上げて長寿命化を図り、メンテナンスを少なくするという実用性を超えて、住居を立派なものに見せたいという欲求や、都市部の生活様式に対する強い憧れがうかがえる。ラフ族独特の世界観よりも個人の考えや主張が表れており、住居形態に個人の主体性が出てきている。しかし、その反面、理想を追い求めて建設された住居は自然発生的な住居ではないため、モンスーンの気候にそぐわないものとなっており、暮らしづらいこともまた事実である。製材のかべは通風を悪くし、金属製の屋根はモンスーンの強い日射を受けて室内に輻射熱を放つ。そのため、寝室として作られた空間を利用せず、伝統的な住居の構法に近い炊事棟の中で寝る事例が少なからず確認されている(図8)。実際に寝る場所はズクベールと呼ばれ、寝室として作られたボーコーと区別されている。

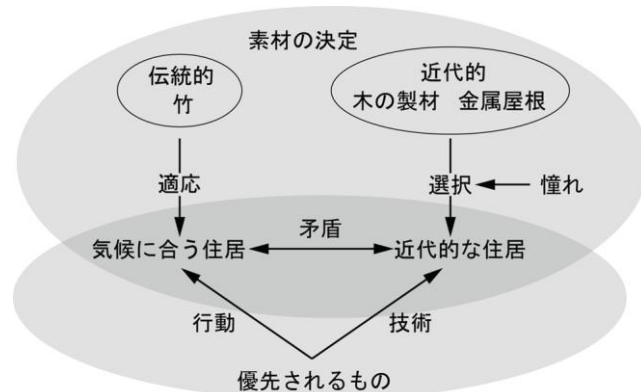


図8 素材の決定と実際の行動

このように、居住空間をめぐる人間の行動は理想的な空間であることよりも、心地よい・過ごしやすいと感じる空間であることに左右されることが分かった。その空間の性質を決定する要素として、素材が大きな役割を示している。

5-2.間取り

素材の選択肢が増えると同時に、これまで単一の世界観しかもたなかったラフ・ニ族は、外部のタイ社会の世界と出会い、住居形態を変化させた。素材の変化により炊事場が離れ、就寝の場所が慣習通りではなくなった。また、タイ政府からの定住化の推奨により住居内に家電やタンスなどの物品が増え、物品が占有する空間が発生し、物品を収容するための個室や倉もつくられた。ほぼ一室で完結していた空間が、素材の多様化や物品の増加によって、それを収納する空間が生まれた。そして、それぞれの領域を持つ空間の性格が強まり、機能が明確化した。さらに、機能によって空間がかべで分けられ、空間が分節された(図9)。

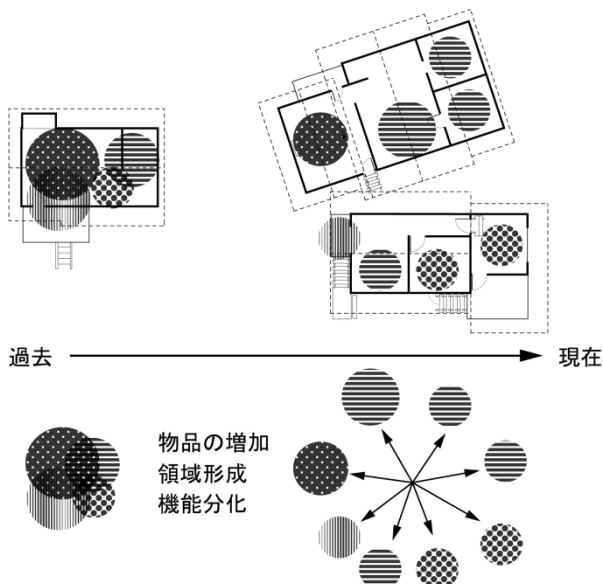


図9 機能分化のプロセス

ラフ・ニ族の独自の世界観に基づいたプランを持つ住居は、いわば「建築家なしの建築」である。しかし、新しい建材や住居形態が流入したことによって本来のプランとは異なる使い方をし、かべを増やして間取りを変化させている。こうした新しい使われ方は新しい文化や概念によって引き起こされたものである。

6. おわりに

「かつては一つの空間を重層的に使用していたが、現在は用途や機能ごとに空間を仕切って使用するようになった」という筋書きは、日本の住居のたどってきた筋書きに重複する。どちらにも共通して言えることは、空間の分節が物品の増加によるものだという点である。物資が豊かになり、住居の中に物品が増えると、その物品

が持つ性格によって空間に領域が形成される。そうした性格を持つようになった領域では、それ以外の行為が行われなくなる。これが機能による分化である。物品が増えるほどに機能による分化が進み、空間が細分化される。こうして細分化された空間はもはや1つの空間である意味をなくし、機能的に使い勝手がいいようにかべが配置される。

また、住居は家族が生活するための器であるのと同時に、家族以外の者の目に触れて、その家族の在り方を示す器でもある。それゆえ、住居の外壁には豊かさへの憧れが表出しやすい。土地の気候に根差した暮らしやすいかべよりも、気候に関係なく作られた近代の技術を利用したかべが優先されるのは、背後にそういった人間の欲求があるからではないかと考えられる。

近代の技術や新しい素材と同時に、新しい住居形態や考え方が流入することで、人間は今までになかった選択肢を得ることができる。「これはこういうものだから」という慣習に疑問を持ち、新しい概念を受け入れ、選択する事で、自然発生的であった住居づくりに主体性が生まれ、住居に家族の価値観が表出するようになった。表出した価値観は、住居の使われ方ににじみ出て、新しい生活様式を再生産する。

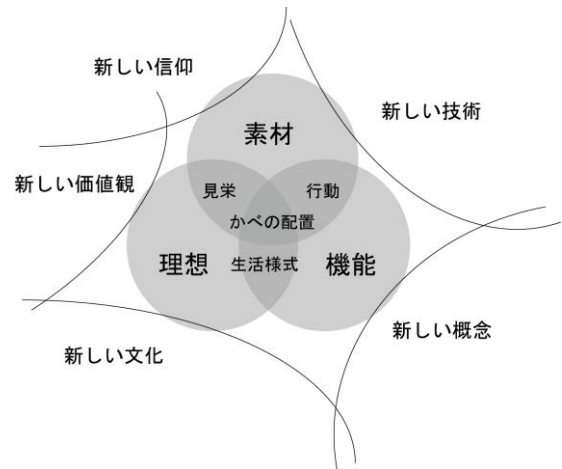


図10 かべを配置する要因

つまるところ、かべには、その土地の人間の価値観や考え方が表出していると考えられる。

参考文献

- ・「住居論」、山本理顕、住まいの図書館出版局、1993
- ・「住居空間の人類学」、石毛直道、鹿島出版会、1971
- ・「住まいの境界を読む 新版 人・場・建築のフィールドノート」、篠原聡子、彰国社、2008
- ・曹香伊「ラフ・ニ族の住居・集落に見る変容過程に関する考察—タイ北部、JT村の事例より—」、2001
- ・鳥越一成、「ラフ・ニ族に見る居住空間の動態に関する考察—タイ北部、JT村の事例から—」、1997
- ・鈴木宏之「ラフ・ニ族における住居、集落移管する研究—住居・集落空間の相似性について—」、1994